XXXX人目の幻想入り

tikuwa@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＸＸＸＸ人目の幻想入り

【Ｎコード】
Ｎ０２４０Ｍ

【作者名】
ｔｉｋｕｗａ@

【あらすじ】
どこにでもいるような少年が幻想郷に迷い込み、幻想郷に関わっていく…といったよくある幻想入りの話。
日常を生きる彼は突然訪れた非日常に対応できるのだろうか…

一、とある少年の幻想入り（前書き）

！注意！
初投稿なので拙い文になっていると思います。
誤字脱字があるかもしれません。
それでもよいかたはどうぞ

一、とある少年の幻想入り

「幻想郷」という世界をご存知だろうか？
…いや、その前に「東方」というものをご存知だろうか？
知っている人は決して少なくないであろう、「東方」。
正式名称は「東方Ｐｒｏｊｅｃｔ」であり、弾幕ＳＴＧの一つである。
「幻想郷」とは「東方」の舞台であり、そこには妖怪、亡霊、神等の今ではあまり信じられていない者達と人間が共存している楽園のような所…という設定である。
そう、あくまで「設定」なのだ…
「設定なんだけどな…。」
突然だが、今俺は多分幻想郷にいる。
山奥で迷子になった、というわけではない。
むしろそうだったらいいのに、とさえ思う。
なぜなら今、俺が立っているこの場所は…
「見渡すかぎり森、だなぁ…。」
なんでこんなところに立っているんだっけ？
確か学校から帰ってきて、部屋にかばんを置いて、トイレに入って…
あれ？トイレに入って…？
「で、こうなったんだっけ…？」
なぜこうなったかの原因はわかる。
トイレのドアを開けて一歩踏み出したらいくつもの目が浮遊している変な空間に落っこちた。
多分、かの有名な「スキマ送り」というやつだと思う。
と、いうことはここは「幻想郷」だと思われる。
というわけである。
「でも…おかしいな…。」

「理由」なのだ。
「スキマ送り」の犯人である「八雲紫」という妖怪は人食いの妖怪である。
だが、幻想郷の人間は食べたりしない。
彼女が人間を食べるときは、幻想郷からみて「外」の世界の人間をさらって食べる、とどこかで読んだ覚えがある。
ということは多分俺は食べられてしまうのだろう。
だが、そこで疑問が生じる。
「なんで…森の中？」
そう、食べるつもりならそれこそ自分の前に持ってきてバクリといってしまえば済む話なのに近くに彼女らしき姿はない。
もしかして違うのでは？と思ったが、必ずしも違うという確証はない。
「ここにいても仕方がないしな…。」
とぼやきつつもとりあえず歩き始める。
ポケットに携帯電話が入っているのだが多分圏外だろう。
文明の利器も使いどころが難しいものである。
ちょっと山奥に入ったり、トンネルや地下などに入ると使えなくなる…っとそんなことはどうでもいい。
歩き始めて一分たったのかたってないのか微妙だが、ぽつん…と木の陰に落ちていたバック（リュックサック？）を見つけた。
なんでこんな森の中に…？名前は書かれていないし、落としたとしても普通は気付くだろうし、忘れていたにしても気付かないほど小さいバックではない。
なんだか怪しいがとりあえず中身を確認する…ってなんだこりゃ！？
拳銃とかが出てきた。
とかっていうのはほかにも携帯食料っぽいものとかナイフだとかが入っていたからなのだが、一番驚いたのが拳銃だったから…というか開けたら一番上に拳銃が入ってるってなんなんだよ…

中身を全部出すと、

拳銃一丁
ナイフ一本
弾薬っぽいもの
携帯食料っぽいもの二個
水筒っぽいもの一つ（多分中身は水）
葉巻一箱
マッチ棒一箱
無線機？一個

が入っていた。
おいおい…どっかの蛇が落としていったのかよ…
だが、おそらくここは幻想郷だ。
妖怪が襲ってくるということを考えれば武器が手に入って良かったかもしれない。
でも、どうやって使うんだろう…よく考えてみれば拳銃の使い方なんて知らないし、ナイフだってまともに使えない。
とりあえず拳銃を構えて少し離れたとこに生えてる木の幹を狙って引き金を……引けない。
ああ、そうだ安全装置っていうのがあったんだっけ。
それらしいものを探すと…あった。
安全装置を外し、また構える。
今度は引き金を引けた。
パン、というよりかほとんどバン！という音が出て、木の幹を見るときちんと弾があたっていた。
思わずため息が出そうになるのを堪え、発射された弾とバックに入っていた弾薬を見比べてみるとやはり同じもの…だと思う。
弾薬の箱に英語かなんだかで麻酔弾っぽいことがわかった。
麻酔銃か…相手にケガを負わせないという点では安心できる。

だが、いくら麻酔銃といえどあてた瞬間にすぐ眠ってしまう訳ではないだろう。
いざ妖怪に見つかってしまうとなかなか厳しい。
そう思うと、さっき試し撃ちをしなければよかったと思う。
とりあえずここから離れないと……ッ！

「ここら辺から音がしたんだけどな～」
「何にもないみたいだね、チルノちゃん。」
「そーなのかー。」
「ルーミアお前それ言いたいだけだろ…。」

右手に拳銃を持ちつつ、声がしたほうから見えないように隠れる。
…びっくりした…ってまだ落ち着けないが、とりあえず誰がいるのか様子を窺うと、どうやら最初に聞こえた声が？…もといチルノで、次に大妖精、歩く死亡フラグことルーミア、霧雨魔理沙というメンツらしい。
とりあえず一人だけだが人間がいたことは喜ぶべきだろう、だが拳銃を手に持っているとさすがに誤解を招くので、安全装置をかけてからポケットにしまう。
…っとどうやら近くまで来たようだ。
「おっかしいなぁ…絶対何かあると思ったのに。」
「その自信は一体どこから出てくるのかな…。」
「んー？鼻からとかじゃないー？」
「鼻血じゃないんだからそれは違うだろ。もちろん鼻水でもないがな。」
…どうしよう、出るタイミングがわからない、というか出づらい。
何か物音でも立てようか、っと足元にちょうどいい木の枝があったので踏む。
パキッと音が鳴る。
「！」

こちらに注意が向けられる、が四人の視線が向いているとさらに出づらくなった気がする。
「誰だ！」
と魔理沙が叫んだ。
いつまでもこうしていられないし、している意味も無い。
木の陰から出る、と同時に四人の視線が刺さる。
「あんた…誰だ？里の人間じゃあなさそうだが…。」
誰と聞かれても答えようがないし、名前を言っても仕方がないだろう。
「……」
言葉に詰まる、というか何を言うべきか悩む。
別に後ろめたいことはない…こともないか、拳銃持ってるし。
とりあえず何か言わないことには何も始まらない。
俺はすでにこの場所は幻想郷だと分かっているが、幻想郷のどこなのかはわからない。
それに、せっかくのチャンスでもあるから…そうだな、あのお決まりのセリフを言ってみることにする。
そう、幻想入りした者がほぼ必ず言うであろう、あのセリフ。

「ここはどこだ？」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ．．．

一、とある少年の幻想入り（後書き）

一応、主人公の少年は東方を知っていて、キャラの名前と能力、テーマ曲は知っていることになってます。
それと、この小説は作者の気まぐれで書かれているので更新は不定期になると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0240m/

XXXX人目の幻想入り

2010年10月8日23時49分発行